

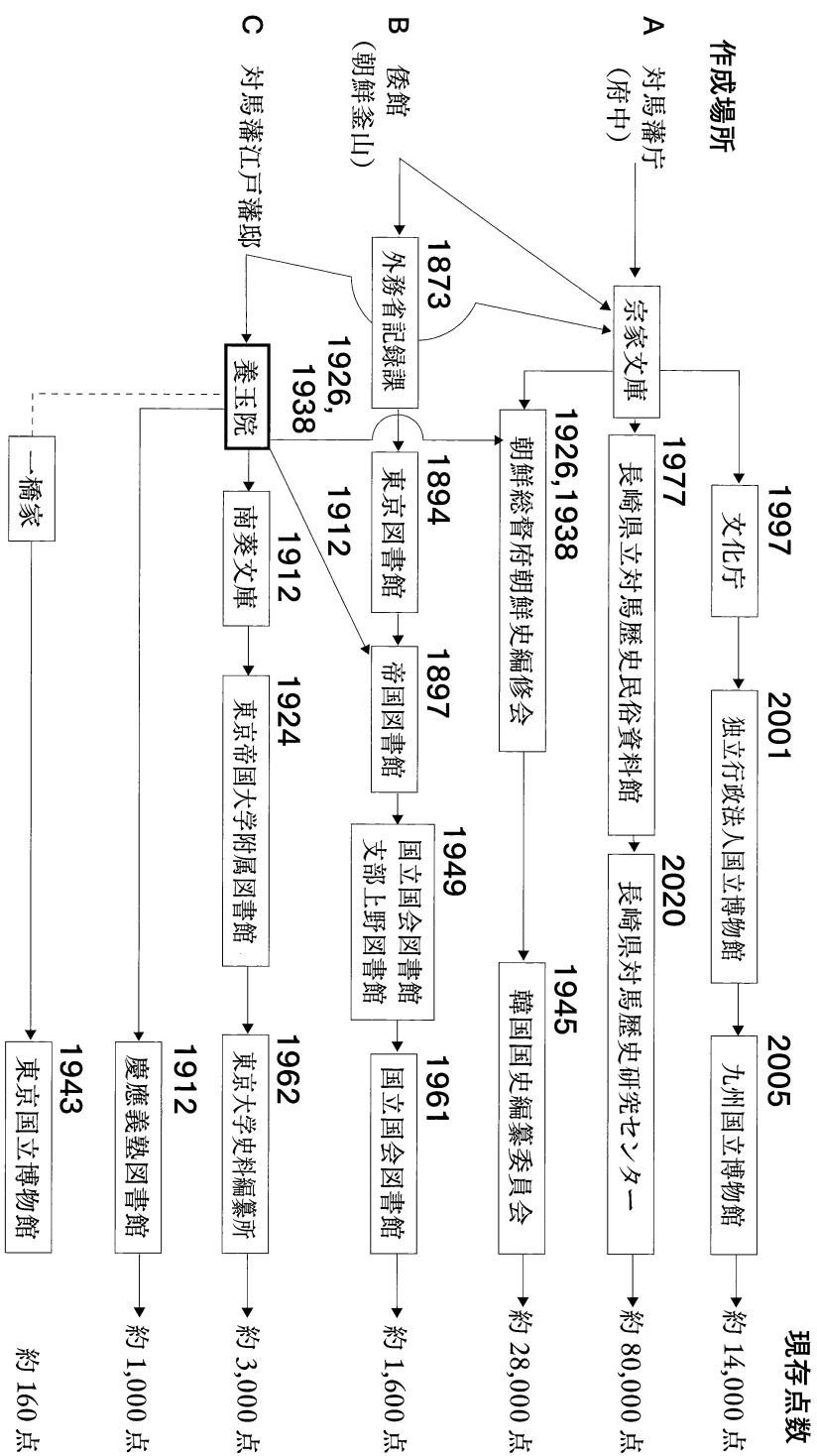
江戸藩邸由来対馬宗家文書の伝来

はじめに

江戸時代において、江戸藩邸で保管されていた対馬宗家文書は、明治初期に養玉院（対馬宗家東京菩提寺）へと移された。^①このとき養玉院は下谷（現・東京都台東区）にあり、現在のように大井（現・東京都品川区）にはなかったことが分かっている。^②養玉院に移された宗家文書は、対馬で保管されていた一部の宗家文書を加えて一体的に保管されたものと見られる。^③しかし、このうち三八点を帝国図書館（現・国立国会図書館）が、約四〇〇〇点を南葵文庫と慶應義塾大学が購入し、^④残りは引き続き養玉院にて保管された。この残りについては、大正一五年（一九二六）になされた朝鮮総督府朝鮮史編修会への売却によって全てが失われることとなる。養玉院に宗家文書が残されていないのは、このような事情から説明することができる。^{⑤⑥}

古川 祐 貴

しかし、養玉院保管分が失われる過程を右のようにだけ理解するのは適当ではない。なぜなら別に「売立」が行われていた事実が判明したからである。養玉院保管分の伝来はこうした「売立」をも考慮したうえで理解されなければならない。一方で「売立」の過程を説明する中で、宗家文書が現在知られる七ヶ所（【図】）
 Ⅱ ①九州国立博物館（約一万四〇〇〇点）、②長崎県対馬歴史研究センター（約八万点）、③国史編纂委員会（約二万八〇〇〇点）、④国立国会図書館（約一六〇〇点）、⑤東京大学史料編纂所（約三〇〇〇点）、⑥慶應義塾図書館（約一〇〇〇点）、⑦東京国立博物館（約一六〇点）以外の場所にも保管されている事実が明らかとなった。宗家文書は何も七ヶ所だけにとどまるものではなかったのである。本稿では、養玉院保管分が失われる過程を説明することは勿論、新たに「発見」された宗家文書についても言及できればと思っている。



【図】対馬宗家文書保管所の変遷

田代和生「国立国会図書館所蔵『宗家文書』の特色」〔参考書誌研究〕76、2015年）5頁より転載、一部変更

一、明治末期の「売立」

帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学が宗家文書を購入したのは、大正元年（一九一二）のことである。しかし、それ以前にも養玉院保管分の一部が「売立」られていたらしいことが次の回顧談から分かる（引用中の（略）は引用者による省略を示す、以下同じ）。

斎藤（兼） また、先代の晩年に、（略）その他に自分の知ってから、市なりまた個人なりで、沢山に買い入れたので記憶に存しているのは、越後の田中某、新発田の溝口家、この口には朱子学の未刻の写本類が沢山にありました。また信州の小諸の藩侯の所蔵本及び小室信夫さんの蔵本、また画家の住吉家、この口には具慶などの粉本及び下絵などがありました、今あつたら大した物です。旗本の後の東条家、この口は写本類の珍しい物が多くございました。また対馬の宗家や、久世子爵家や、また公卿華族の竹屋家、及びその他本郷の医師の後で岡さんの本など、ずいぶん珍物がありました。なお直接に鉄牛禪師の所蔵の本を、麻布の某寺から買い受たり、鈴木真年さんの本が交詢社にあつたのを買いました。これは写本類の珍しいのが沢山ありました。このほかにも沢山ありましたが、一寸頭に浮かびませんから略します。その当時の市会はなかなか大口物が相当にありまして、月の内で一回位は、お互いの意地っ張りからでもないのですが、夜通しやるような事は珍しくないのです。それ位各自お互いに商売が熱心で、盛んであつた

という事が裏書き出来るわけです。（略）

話者の「斎藤（兼）」とは、第二代琳琅閣書店主人・斎藤兼蔵のことである。有限会社弘文荘代表社員・反町茂雄は、「訪書会」の企画の一つとして、「（古典籍）業界の故老の回顧談を聞く催し」を行っていた。⁽⁸⁾それは後に「紙魚の昔がたり」としてまとめられ、昭和九年（一九三四）一〇月に、三五〇部限定で販売されることとなる。⁽⁹⁾先の引用は、斎藤兼蔵（二代目）による回顧談というわけである。

琳琅閣書店では「先代の晩年」に「対馬の宗家」などの「本など」を扱ったという。「先代」とは初代琳琅閣書店主人・斎藤兼蔵のことであり、明治四〇年（一九〇七）一二月に没したことが知られている。⁽¹⁰⁾よって、それ以前に「対馬の宗家」などの「本など」を扱ったということなのだろう。勿論ここで言う「対馬の宗家」の「本など」とは養玉院保管分を指している。すなわち、養玉院保管分は大正元年（一九一二）に帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学が購入する以前から「売立」が行われていたことになるのである。「先代の晩年」に扱われた「本など」が具体的にどのようなものを指すのかは分からない。またどこへ行ったのかも定かではない。

「紙魚の昔がたり」には宗家文書に関する他の回顧談も収録されている。次に紹介するのは、村口書房初代主人・村口半次郎の回顧談である。⁽¹¹⁾

井上 宗さんの口の美術倶楽部で夜明し入札の話を一寸……

反町 対馬の藩主の宗さんですね。

井上　そうです。

村口　宗というお方は非常に立派なお方だったんですが、取巻きが悪かった、それであの有名な蔵書家の本が七花八裂になってしまった。その中かなりの品がありました、それが美術倶楽部に出ました。で、本屋が皆青柳に寄り合いました、そうして道具屋と対抗して買おうというのです。ちょうど磯部の親父が平山堂と懇意ですから、それに頼んで鑑て貰った。ですから入札の事がよく判る。それでいろいろ入れ知恵されたものですから、だんだんとこっちの予定額より値があがって、殆ど倍位になってしまった。ですからしいにはこれじゃ堪らないから、御免を蒙るという人が仲間の中に出来たが、とにかく本屋と道具屋の争いなんだからとだめて、一同で倶楽部へ出掛けたんです。行ったところが、とても大勢なので驚きました。これでは買入れ後の我々仲間の分配と、その上利益などの事を思いますと、とても普通の値段では駄目だから、一人に二百円ずつの買責任を持つという前約で入札しました。結局本屋の方へ来たのですが幾らも儲かりませんでした。金高も四千元を出ず、三千幾らだったと憶えています。そのうちで私は古版の朝鮮本が非常に良かったと思います。皆古刊本でした。それは一口入札で買いましたが、吉田東伍さんに願って、今たぶん新潟図書館にはいつておられます。まあ結果から見ると、つまらぬ入札でした。(略)

「美術倶楽部」に出品された宗家文書を「道具屋」と争って購入したが、結果として「つまらぬ入札」になってしまったことが

述べられている。出品された宗家文書の内容は相変わらず分らないものの、「古版の朝鮮本が非常に良かった」と記されていることから、朝鮮本をはじめとした典籍類が中心だったのかもしれない。時期について推定すると、両国に東京美術倶楽部が創立されたのが明治四〇年（一九〇七）であり、吉田東伍が没したのが大正七年（一九一八）であることを踏まえれば、明治四〇年（一九〇七）から大正七年（一九一八）の一〇年間となる。

回顧談に出てくる「新潟図書館」は現在の新潟県立図書館であり、開館は大正五年（一九一六）のことである。¹⁴ 当時の記録に関して同館に尋ねてみたところ、「大正六年七月二十日 吉田東伍氏寄贈」と書かれた史資料が存在するという。同館によれば、吉田が寄贈したのは「韓書」六件八六冊とそれ以外九件一四冊の計一五件一〇〇冊である。後者は朝鮮関係の一般書であるが、「韓書」は村口の回顧談にあった「古版の朝鮮本」と考えることができる。しかし、寄贈を行った吉田自身も朝鮮本を蒐集していたことを想起すれば、¹⁵ 必ずしも全ての「韓書」が宗家文書だったとは限らない。村口の回顧談から、宗家文書由来のものが含まれる、といったことを想像するくらいのものであろう。¹⁶

他方、吉田東伍が集めた朝鮮本については、「東伍の著書と彼が蒐集していた朝鮮本中、歴史・文学・法律に関する一千七百余冊及び「大日本地名辞書」の原稿等は早稲田大学図書館に譲渡し、その余の五百七十余冊二帖一折は、長男春太郎氏から新潟県立図書館へ寄託された」とも説明されている。¹⁷ ここから新潟県立図書館だけでなく、早稲田大学図書館にも朝鮮本が収められていたことが分かる。吉田自身、早稲田大学にも奉職したことから、¹⁸

彼の蔵書（朝鮮本を含む）が入っている何ら不思議ではない。早速、早稲田大学図書館にも尋ねてみたところ、果たして大正六年（一九一七）六月に朝鮮本二七一件一七七一冊が寄託され、死後の同七年（一九一八）四月に寄贈に切り替えられていた事実が判明した。¹⁹二七一件一七七一冊は先に引用した「一千七百余冊」と合致し、信憑性の高さを窺わせる。²⁰ただこれらの朝鮮本から宗家文書由来のものを特定することは困難であり、したがってこちらに関しても内実は分からない。

さて、村口の回顧談から分かることは以上のようなものであるが、この話には続きがある。反町と同じく村口の聞き取りに同席していた井上書店主人・井上喜多郎の回顧談にも耳を傾けてみよう。²¹

井上 その後、日本橋の斎藤という大きな潰し屋から、宗家の対外関係の記録が出ました。大変な嵩で馬力に十何台というのです。それは朝鮮関係のもので、それはその時に……潰し屋ばかり歩いている……ある人の口入れで、伊藤福太郎さんと私と大島屋さんの三人が参りました。値段が出来まして、馬力で十何台というものをその晩すぐ引き取って、青柳へ引き込んで入札しました。それが茶表紙のもので、ずっと揃っている誠に結構な記録でして、対外関係の記録がこのように揃っておった事は、我国の史学上実に貴重なものと申し上げられます。

反町 それは今どこへ行っておりましょうか。

井上 今どこへ行っているか私は存じませんが、この品物がそのまま全部揃ってあったら、先程も申し上げた通り大変

なものです。多分切れ切れになった事とされます。

村口 大部分は慶応大学に入っていると覚えております。

東 それをみんな潰しに出したんでしょうか。

井上 そうなんですな。

一心堂 乱暴な話で、ずいぶん勿体ない事ですな。

村口 朝鮮総督府にでも売り込めば大したものですよ。

西塚 それはいつ頃の事ですか。

井上 確か今から二十五年前の事だったと思います。それから村口さん、吟香さんのお話はどうでしょう。

井上は「馬力に十何台」にも及ぶ宗家文書を扱ったという。しかもその中には「宗家の対外関係の記録」「朝鮮関係」のものが多分にあったことをも記憶する。「茶表紙」で「ずっと揃っている」（井上）、「大部分は慶応大学に入っている」（村口）といった発言から、現在慶應義塾図書館が所蔵する宗家文書の中でも「朝鮮往復書」、あるいは「信使記録」のことではなかったか。²²ただ「馬力に十何台」といった物量を考えると、それでも全体の一部分に過ぎなかっただろう。このとき「売立」られた宗家文書こそが、後に帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学が購入したものと考えられる。

この回顧談がいつなされたのか判断できないことから、井上の言う「今から二十五年位前」も判然としない。「紙魚の昔がたり」の初版発行（昭和九年（一九三四）を下限とすれば、回顧がなされたのはそれ以前、「売立」自体は明治四二年（一九〇九）を下らないことになる。帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学による購入（大正元年（一九一二）以前から多くの宗家文書が古書業

界に「売立」られていたのである。ここから察するに、帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学が宗家文書を購入した先は、宗家から直接というわけではなく、古書店、あるいは古物商を介したかたちで、といったことになるだろう。

以上の検討から、帝国図書館・南葵文庫・慶應義塾大学が宗家文書を購入する以前に、養玉院保管分は少なくとも三度の「売立」に遭っていたことが判明する。村口半次郎が扱った際には「美術倶楽部」が出品していたと言うから、「売立目録」が作成されていた可能性もある。ただ現存する「売立目録」の中に對馬宗家のものは一件も検出されない。²⁴⁾ 単に現存していないだけなのか、元々刊行されていないのか、その判断は難しいところであるが、²⁵⁾ 少なくとも養玉院保管分はすでに知られる宗家文書所蔵施設以外にも新潟県立図書館、早稲田大学図書館にも所蔵されていることが明らかとなった。²⁶⁾

二、南葵文庫・慶應義塾大学購入分のその後

養玉院保管分は一部が「売立」られた後、新潟図書館や早稲田大学図書館に収まるとともに、三八点が帝国図書館に、約四〇〇〇点が南葵文庫・慶應義塾大学に分けて購入された（大正元年（一九一二年）。約四〇〇〇点の内訳は、約一〇〇〇点が慶應義塾大学、残りが南葵文庫といった具合であったが、当初は慶應義塾大学が一括購入する予定だったらしい。²⁷⁾ ところが、点数があまりにも多かったことから、南葵文庫と分割して購入することとなった。これらの宗家文書は、後に朝鮮史編纂委員会（朝鮮史編修会

の前身²⁸⁾）の知るところとなり、委員であった栢原昌三による出張調査が行われている。栢原の出張復命書に目を向けてみよう。²⁹⁾

復命書

大正十二年五月、東京市及京都市に出張して史料を採訪せよとの命を受けまして、四日、京城出發、七日、東京市に着きました、

東京市に於きましては、東京帝国大学附属図書館、同文学部史学研究室には、史籍文書記録の珍稀なものが多く保存せられてをりますし、同文学部史料編纂掛には、母国史との関係史料が多数に蒐集されているのであります、又、内閣記録課には、大学に劣らぬ数多の史籍があります、慶應義塾大学附属図書館、南葵文庫には、宗伯爵家のものが来てゐるのであります、之らは、重なるものであります、この他、個人の蒐集してゐるものが、なか／＼多数に御座います、

之故に、東京市に於きましての採訪は、多くの日子を要しなければ、遺漏なく蒐集することは困難なのであります、私は、此度の出張に於いては、まづ東京帝国大学文学部史料編纂掛に蒐集せられてゐる母国との関係史料の採訪を目的といたしまして、在京五日間を、史料編纂掛の閲覧室に暮らしまして別紙の目録を作りあげました

かくて、十三日、東京を去りまして、京都に参りました、（略）

大正十二年五月二十五日

朝鮮史編纂委員会委員

栢原昌三（印）

栢原は大正一二年（一九二三）五月四日に京城を出発し、東京

と京都の調査に出掛けた。目的は『朝鮮史』編纂に資する史料探訪である。「復命書」の中には東京での調査先が列記されており、そこに「宗伯爵家のもの」を所蔵するところとして、「慶應義塾大学附属図書館」と「南葵文庫」の二ヶ所が挙げられている。しかし、「遺漏なく」調査するためには「日子を要」するところから、「在京五日間」全てを「東京帝国大学文学部史料編纂掛」に充てることにした。したがって、このとき作成された「別紙の目録」中に「慶應義塾大学附属図書館」と「南葵文庫」の宗家文書の目録はない。ただ栢原が調査を検討していたことから推して、慶應義塾大学と南葵文庫が宗家文書を購入していたことは広く知れ渡っていたのであろう。

さて、当該調査を終えた栢原は、二ヶ月後再び「東京市史料探訪」を実施している。先ほど同様に「復命書」の内容を引用する。³⁰⁾

復命書

大正十二年七月、東京市に於ける史料蒐集の命を受けまして、七日出發、十一日、東京につきました、

五月、命に依つて、上京いたしました時は、専ら、東京帝国大学史料編纂掛について、その蒐集史料を検索いたしましたのですが、この度も、又、専ら同掛に参りまして、別紙の目録を作りました、

東京帝国大学史料編纂掛は、相当大きな規模で、史料を蒐集してゐますので、絶へず史料が集りますから、この度の出張で、我朝鮮史編纂委員会の蒐集すべき史料は殆尽しましたけれども、その後には於いて、同掛で蒐集されました材料は、他日、又、出張して探訪しなければ、ならないのであり

ます

東京帝国大学史料編纂掛の探訪を終わってから南葵文庫に参りまして史料を検索して別紙の目録を作りました、そうしてのち私は、東京帝国大学附属図書館に植松司書官、帝国図書館に二宮司書、内閣記録課に牧野鐘之助氏、宮内省図書寮に本多編輯官、南葵文庫に片岡三郎氏、慶應義塾大学附属図書館に、安食高吉氏と懇談しまして、そこに保存されてゐる史料の謄写について、出来得る限りの便宜をうける約束をいたしましたして帰りました、又、蔵書目録の寄贈を受けることも約束いたしました

かくて、廿二日、東京出發、京都へ立ち寄りまして、廿七日、帰任いたしました、

大正十二年八月三日

朝鮮史編纂委員会委員

栢原昌三

このたびも栢原は東京での調査を終えた後に京都へ向かっている。しかし京都に関しては、前回付されていたような目録はなく、またどこを訪れたのかも判然としない。このことから調査のメインはあくまでも東京だったことが分かる。その東京においてもほとんどを「東京帝国大学文学部史料編纂掛」で費やしたらしい。前回同様と言えるが、その甲斐あって「蒐集すべき史料は殆尽し」たという。同所を後にした栢原は「南葵文庫」へと向かい、「別紙の目録」を作成。その後、「東京帝国大学附属図書館」などの担当者「懇談」し、「史料の謄写」について「出来得る限りの便宜をうける」こと、「蔵書目録の寄贈を受けること」の

二点を約束した。これは今後も続く東京調査をスムーズに進めるための布石と考えられる。

栢原はこのたびの調査において「南葵文庫」の「別紙の目録」を作成していた。それを全て引用すると次の通りである。³¹⁾

南葵文庫

三韓御征伐記

一冊

歳遺(遺り)図書事件

一冊

対馬国以酹庵議草

一冊

御代々朝鮮人往反書翰並三使姓名

一冊

公貿易開市事件

一冊

「三韓」などの言葉から朝鮮関係であることは間違いない。ただこれらが宗家文書かどうかは判断が難しいところである。宗家文書であったとするならば、何故五冊だけなのかが分からない。

「南葵文庫」が購入した宗家文書は約三〇〇〇点にも上り、朝鮮関係であったとしても、五冊に留まるものではなかったであろうからである。ここから五冊は宗家文書ではない可能性が高い。栢原は理由不明ながら「南葵文庫」の宗家文書を調査しなかったということなのだろう。

また「慶應義塾大学附属図書館」所蔵の宗家文書に関しても調査された形跡がない。目録が付されていないことから、そもそも調査自体なされなかったと見るべきだろう。ただ出張復命書を多く所蔵する国史編纂委員会には、「慶應義塾大学附属図書館所蔵宗家記録目録」といった史料が存在する。³²⁾これは慶應義塾大学が購入した宗家文書の中でも、「諸方御内用往復書状控」「朝鮮往復書」「信使記録下書目録」を五〇〇点ほど書き出したものであ

る。リストのほか出張内容や出張期間、出張者などを示す情報はない。要は出張復命書の体裁をなしていないのである。最終丁に朝鮮総督府中樞院による図書登録印(「大正十二年十二月十九日」)が捺されるくらいのものであろう。だがこの登録印が重要な意味を持つ。大正十二年(一九二三)二月十九日以前に、慶應義塾大学の調査が行われていたことを示すものだからである。調査者はいったい誰なのであろうか。

現存する出張復命書全てを閲覧しても、この時期に「慶應義塾大学附属図書館」に出張した人物はいない。であるとすれば、出張者は栢原以外にあり得ないということになるだろう。栢原は大正十二年(一九二三)七月に「慶應義塾大学附属図書館」を確かに訪れていた。同館に関しては「安食高吉」と「懇談」したことはないしか記されていないが、実際は宗家文書を調査していたのではないだろうか。想像を逞しくすれば、「慶應義塾大学附属図書館所蔵宗家記録目録」は栢原のこのときの復命書に付された書類だったのかもしれない。それが何らかの契機に離れてしまい、別々になってしまったのだろう。「慶應義塾大学附属図書館所蔵宗家記録目録」に出張内容や出張期間、出張者などの情報がないのはそのためではないだろうか。栢原は七月調査の折に慶應義塾大学が購入した宗家文書を調査していたのである。

しかし、東京は大正十二年(一九二三)九月一日に関東大震災に見舞われる。東京帝国大学附属図書館の被害は甚大で、朝鮮総督府を通じて借り出していた朝鮮王朝実録(五台山本)などが失われた。³³⁾同館に対して南葵文庫は蔵書一〇万点近くの寄贈を表明する。³⁴⁾この中に南葵文庫が購入した宗家文書が含まれていたので

ある。⁽³⁵⁾以後、東京帝国大学附属図書館にて管理されることとなる。寄贈された宗家文書は、昭和三七年（一九六四）に東京大学史料編纂所へと移され、同所には管理に際して使用されたと思しき目録四冊が伝来する。①「宗家史料目録」、②「宗家史料目録」、③「宗家史料目録稿」、④「宗家史料目録」である。⁽³⁶⁾表題が同じで区別がつきにくいのが、罫紙枠外や版心にある印字に違いが見られる。すなわち、①は「東京帝国大学附属図書館」、②は印字なし、③は「東京大学」、④は「史料編纂所」といった具合である。②印字なしを並べるのは困難だが、たとえば①「東京帝国大学附属図書館」は、①「東京大学」や④「史料編纂所」よりも先に作成されたものであろう。少なくとも東京帝国大学附属図書館、東京大学史料編纂所はこうした目録によって南葵文庫から寄贈を受けた宗家文書を管理していたと考えられる。そして東京大学史料編纂所では再度の調査が行われ、その目録が平成六年（一九九四）に完成する。⁽³⁷⁾

一方で慶應義塾大学が購入した宗家文書のその後はあまり分かっていない。帝国図書館から宗家文書を引き継いだ国立国会図書館が昭和四二年（一九六七）時点において、「近年まで長崎県史編集室が謄写版で作成した『国会図書館所蔵文書目録・慶應大学図書館宗家記録雑集目録抄』（長崎県史編集室刊、[1967]、〈GB2-G15〉）に頼る状況にあった」と述べていることから、慶應義塾大学分も同様の状況だったのであろう。その後大学自身が『慶應義塾大学所蔵古文書目録 武家文書 宗家・柚谷家』（慶應義塾大学古文書室、二〇〇八年）を刊行したことで、従来の目録に取って代わることとなった。同大学が調査に乗り出した背景に

は、平成二〇年（二〇〇八）三月二日になされた重要文化財指定と無関係ではなからう。指定後、国庫補助を受けた修理事業が開始され、近年では「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」で一部のデジタル画像公開がなされている。⁽³⁸⁾

三、朝鮮に渡った養玉院保管分

明治末期の度重なる「売立」を経てもなお養玉院保管分はなくならなかった。なぜなら武田勝蔵が調査に入れているからである。武田は慶應義塾大学の一年次（大正六年（一九一七））に養父の郷里である対馬を研究対象に選んだ。⁽³⁹⁾卒業論文の題目は「対馬島主宗氏の朝鮮修交貿易史」。執筆に際して度々養玉院を訪れたと思いが、記録がなく詳細は分からない。武田は卒業論文執筆後も調査に入り（大正一四年（一九二五））同一五年（一九二六）、豊臣秀吉書状などの「貴重な史料」を次々と紹介していった。⁽⁴⁰⁾それらは後に武田によって『宗家古文書』として刊行される予定であったが、養玉院保管分が朝鮮史編修会へ売却されたことで頓挫することとなった。⁽⁴¹⁾

ところで、武田が「貴重な史料」を紹介し得たのはいかなる理由によってであろうか。勿論、養玉院保管分に「貴重な史料」が含まれていたためであるが、これらがそれ以前の度重なる「売立」でも失われていなかった事実もつと注意されてよい。売れなかったのではなく、対馬宗家として売るつもりがなかったと読めるからである。武田が「貴重な史料」を紹介し得た背景には、このような事情があった。ただ「貴重な史料」の全貌はよく分かつ

ていない。武田も全てを紹介し得たわけではなかったからである。豊臣秀吉書状などが含まれることくらいが想像されるに過ぎない。

しかし、これらについても全く手掛かりがないわけでもない。対馬宗家は、大正一五年（一九二六）四月に朝鮮史編修会へ『朝鮮史』編纂に資する宗家文書の売却を決定した。⁽⁴⁴⁾これは売却金を「家計の一助」にする意図があったことが分かっている。同年五月に養玉院保管分が、七月に対馬保管分が京城に向けて搬出された。この過程で注目すべきは、対馬宗家として売らざるつもりがなかった「貴重な史料」が含まれていたことである。ただこれらは対馬宗家から特別に借り出したもの、借用分として位置付けられていた。つまり「貴重な史料」は決して売却されたわけではなかったのである。

京城へ運び込まれた宗家文書は、朝鮮史編修会による整理作業を経て、目的——『朝鮮史』編纂に資する——に適わないものの返却が二度行われた（昭和二年（一九二七）五月・同四年（一九二九）七月）。しかし、二度の返却に「貴重な史料」が含まれていた形跡はない。「貴重な史料」をめぐるのは、昭和二年（一九二七）八月一日に対馬宗家家令・齋藤定得による返却督促がなされている。朝鮮史編修会はこうした督促に反応せずにいたが、三度目の督促の際にかわしきれないと思ったのか、朝鮮史編修会顧問・黒板勝美（東京帝国大学教授）に対して相談が行われた。黒板へ送られた手紙は次のようなものであった。いささか長文ではあるが、参考資料も含め全文を引用したい。⁽⁴⁵⁾

昭和三、一一、二九起案

（昭和三）
十二、一、執行

（昭和三）（二）（二九）
決裁

宗家文書二関スル件

拜啓時下初冬ノ御益々御健勝奉慶賀候、陳者先年来種々御配慮相受居り候宗家文書ノ内返戻スヘキ分ニ属スル判物類ノ範圍ニ付、双方間ニ意見ヲ異ニセル点有之候、抑モ本会ニ於テハ左記第一号ノ文書ニ基キ宗家所蔵ノ文書及記録類中朝鮮關係ノモノハ全部本会ヘ取得スル方針ナリシニ第二号文書第四項ノ如キ条件挿入セラレアリ為メニ系図類、御手許文庫類及御判物書物等ハ例外ナク宗家ヘ返還スルヲ要スル様解セサルヘカラルコト、ナルカ如シ、現ニ第三号文書ニ依リ相当御判物書等ヲ返還セルニ拘ラス（別紙目録御参照）宗家ヨリノ第六号及第八号ノ照会アルハ右ノ趣旨ニ解スル外可無之、若シ果シテ然リトセバ誠ニ迷惑至極ニ被存候、右ノ中ニハ秀吉、秀次、家康等ノ如キ判物有之、史料トシテ非常ニ必要ノモノアルニ付、本会ニ於テハ是非共当方ヘ留メ置キタキ考ニ候ニ就テハ、此等ノ点ニ関シ貴下ニ於テハ当時御立合被成下候關係モ有之、何カト適當ノ御解釈モ無之候ニヤ、一応御意見承り度此度御依頼申進候
追テ左記ハ大略ノ經過ニ候ヘ共為念申添候

記

（第一号）

○宗家文書ノ内預リ書提出ノ件

昭和二、三、一七、
朝史秘第一六八号

会長発宗伯爵家令宛

預り書

- 一、宗伯爵家御所蔵文書及記録類 東京ヨリ受領ノ分
但朝鮮関係書類及記録等ヲ除ク
- 二、宗伯爵家御所蔵文書記録類 対州ヨリ受領ノ分
但朝鮮関係書類、記録以外ノ分
細目ハ追テ差出可申候
右正ニ預り候也

(第二号)

○東京華族会館ニ於ケル本会側ノ覚書

- 昭和二、三、一七、
出張員手記
- 一、東京ヨリ送付ノ分ト対馬ヨリ送付ノ分トヲ分離シ整理シ置クコト

- 二、東京ノ分ハ原則トシテハ朝鮮関係ノ分以外ノモノ多シ、而シテ朝鮮関係ノ分ハ之ヲ府ニ買上クルコト
 - 三、対州ノ分ハ原則トシテハ朝鮮関係ノモノ多シ、然シ其ノ内朝鮮ニ関係ナキモノハ之ヲ宗家ニ返還スルコト
 - 四、系図類、御手許御文庫類(正 二 位様何・・・・)
- 御判物類ハ此際返還シテ貰フコト

(第三号)

○借書返進方ノ件

昭和二、四、二〇、
朝史庶第一五五号

本会発宗伯爵家令宛

宗伯爵家御所蔵ニ係ル左記文書類永々拝借中ノ処、今般入用相済候ニ付、別途貨物便ヲ以テ返進候間、御查收ニ預り度此段御挨拶申進候也

追テ現品到達ノ上ハ領収証御遣ハシ相成度申添候

古文書類目録(別紙ノ通)

書籍類目録(省 略)

(第四号)

○文書類領収ノ件

昭和二、五、二五、

宗伯爵家々令発本会宛

宗伯爵家所蔵ニ係ハル文書類、曩ニ御借用ノ処御用済ミニ付、本年四月二十一日庶第一五五号目録ノ通御返戻相成、正ニ領収致候也

(第五号)

○判物其他返戻方ノ件

昭和二、八、一、

宗伯爵家々令発本会宛

先般来宗家ヨリ差出置候書物ノ内判物其他特別貴重書類御返戻ヲ受クヘキ分有之、最早展覽会モ閉会御用済ニ至リ居り候儀ト存候ニ付、御返戻被下度此段御照会ニ及候也

(第六号)

○同上ノ件

昭和二、九、二三、

宗伯爵家々令発本会宛

拝啓曩ニ御照会ニ及ヒ置キ候宗家貴重書類其他御用済ノ分御返却ノ件、今以テ何等ノ御回報ニ接セス、如何ノ御都合ニ候ヤ、再応及御照会候 敬具

(第七号)

○宗家貴重書類返却ノ件

昭和二、九、二九、
朝史庶第三三三三号
本会発宗伯爵家々令宛

九月二十三日付御照会相成候首題ノ件了承、右ハ目下細目調整中ニ有之候間、御迷惑乍ラ漸時御猶予相成度此段及御回答候ヤ

(第八号)

○宗家書類ノ内返却相成ルヘキ分ノ件

昭和三、一一、一、
宗伯爵家々令発本会宛

拝啓先般御持越相成候宗家書類ノ内御引分御返却相成ルヘキ分竝宗家系図判物類、今御返却無之、如何ノ御都合ニ候哉、至急御返戻被下度、此段御照会申上候也

要点は次のようにまとめられよう。①対馬宗家側と朝鮮史編修会側で「意見ヲ異ニセル点」があったこと、②朝鮮史編修会としては「返戻スヘキ分」は返却したとの認識であり、「秀吉、秀次、家康等ノ如キ判物」は「朝鮮関係ノ分」に含まれること、③それにもかかわらず、対馬宗家側が返却を要求してくるのは、第二号

第四項が存在するためであること、④購入に直接携わった黒板の「適当ノ御解釈」、あるいは「御意見」を伺いたいこと、である。

「貴重な史料」全てが「朝鮮関係ノ分」に含まれると考えたい朝鮮史編修会に対し、対馬宗家側は借用分に過ぎず、早期に返却すべきであると主張する。「意見ヲ異ニセル点」があることは確かであるが、黒板同様、購入に直接携わった中村栄孝が戦後「借用中」との認識を示していたことに鑑みれば、朝鮮史編修会側の主張は単なる方便に過ぎなかつたことが分かる。やはり「貴重な史料」は借用分だったのである。

手紙には参考資料のほか「宗家史料目録」が付されており、これが「貴重な史料」＝借用分の一覧であつたと考えられる。⁽⁴⁵⁾ 豊臣秀吉書状、豊臣秀次書状などが含まれており、武田が紹介したものと一致するからである。朝鮮史編修会からの手紙に黒板がいかなる反応を示したのかは定かでないが、この後四回目の返却督促が届いてもなお「貴重な史料」の返却はなされなかつた。対馬宗家との間に何らかの和解が成立した様子も見られない。少なくとも朝鮮史編修会は「貴重な史料」も含めたかたちで宗家文書を所持し続けたのである。朝鮮総督府の廃庁に伴い、同会が収集してきた全ての歴史資料は朝鮮側、そして後に韓国政府に引き継がれる。養玉院保管分はこうにして完全に失われてしまったのである。

おわりに

以上を経て、養玉院保管分は各地に分散することとなった。明

治末期の「売立」と吉田東伍を介するかたちで新潟図書館（現・新潟県立図書館）と早稲田大学図書館に朝鮮本の類が、その後の「売立」を経て慶應義塾大学（慶應義塾図書館）と南葵文庫に「対外関係の記録」が移っていった。特に吉田東伍を介したことで新潟県立図書館と早稲田大学図書館にある朝鮮本の類は宗家文書かどうか分からなくなってしまった。両館ともに吉田のコレクションとして寄贈を受けているからである。また南葵文庫が買い取った分は、東京帝国大学附属図書館が関東大震災に罹災したことで全てが同館へ寄贈された。これが後に東京大学史料編纂所所蔵分を形成することとなる。

しかし、こうした「売立」を経ても養玉院保管分はなくならなかった。「売立」られなかった宗家文書の他に、売るつもりもなかったものの「貴重な史料」が含まれていたからである。これらはその後も「売立」に遭うことはなく、特に「貴重な史料」に関しては武田勝蔵による紹介がなされていった。ところが、これらの宗家文書にも転機が訪れる。朝鮮史編修会への売却が決定したのである。同会が必要としたのは『朝鮮史』編纂に資する史料であり、購入に伴って搬出されたのは養玉院保管分全てと対馬保管分であった。搬出された養玉院保管分の中には「貴重な史料」も含まれていたから、対馬宗家はこれを朝鮮史編修会による借用分と見做し、その他との区別を図ったのである。

朝鮮史編修会は購入して一年が過ぎたあたりに目的——『朝鮮史』編纂に資する——に適わない宗家文書の返却を二度行ったが、その中に借用分が含まれることはなかった。ゆえに対馬宗家は借用分の返却を求めて督促していくことになるのである。督

促は確認できるだけでも四度に及ぶ。特に三度目のときに同会はかわしきれないと思ったのか、朝鮮史編修会顧問・黒板勝美へ手紙を送り、対応を協議しようとしている。このとき添付された「宗家史料目録」から借用分の全貌が明らかとなる。同会是对馬宗家側と朝鮮史編修会側とで「意見ヲ異ニセル点」があったと述べているが、後に中村栄孝が未だ「借用中」との認識を示していたことに鑑みれば、同会が解釈を曲げて「貴重な史料」を取得しようとしていたことが明らかである。結局、四度目の督促を経てなお借用分の返却がされることはなく、戦後これらは国史編纂委員会へと引き継がれ、同委員会の「貴重資料」として位置付けられるに至る。対馬宗家側の返却督促が止んだ理由は分からない。養玉院保管分はこのようにして完全に失われることになった。もし借用分の返却がなされていれば、養玉院保管分は完全に失われずに済んだと思いが、朝鮮史編修会による返却は全て対馬に、対してなされていたから、やはり失われていたと見るべきだろう。宗家文書は幾度となくこうした変遷を繰り返しながら、現所蔵施設に至るのである。その変遷の一つひとつを追っていくことが目下の課題であり、最終的には全ての所在地を把握できればと考えている。

① 田代和生「改訂『対馬宗家文書』について」（同監修『マイクロフィルム版 対馬宗家文書 第Ⅱ期江戸藩邸毎日記 別冊 下』ゆまに書房、二〇〇三年）二三頁。

② 養玉院は東叡山の一山寺院として、屏風坂門内に建てられた三明院を寛文三年（一六六三）に改称したことにより始まる。元禄十一年（二六九八）に火災に遭ったことで下谷への移転、再建を余儀なくされるのである（遠賀亮達「金光山養玉院大覺寺の変遷」（『瑞應——養玉

院四百年史——』宗教法人養玉院、一九九九年）三二・三五〜三六頁。この地は後に上野駅構内の鉄道用地として収用され、現在地である大井に移転したのは、大正十一年（一九二二）のことであった。移転後、隣接していた如来寺と合併することとなり、同一五年（一九二六）より現・養玉院となった（同「新生養玉院」（前掲「瑞應」）一二頁）。なお下谷時代の養玉院については、『平成25年度特別展 大井に大仏がやってきた！——養玉院如来寺の歴史と寺宝——』（品川区立品川歴史館、二〇一三年）一頁で場所の特定がなされている。

③ 明治以降、何度か対馬から養玉院へ宗家文書が運び出されていた事実が明らかになっている（佐伯弘次「対馬宗家文書の中世史料」（平成一〇〜一二年度科学研究費補助金・基盤研究（B）（2）研究成果報告書『宗家文庫資料の総合的研究』研究代表者・佐伯弘次、二〇〇一年）二三頁）。

④ 田代前掲「改訂『対馬宗家文書』について」二三頁。

⑤ 朝鮮史編修会への売却については、古川祐貴「大韓民国国史編纂委員会所蔵『對馬島宗家文書』の形成」（『日本史研究』七一、二〇二一年）二三〜二六頁で明らかにしている。

⑥ 現在、養玉院には歴代当主関係の画像三二幅が伝わる（前掲「大井に大仏がやってきた！——一九六頁）。ただし、これらを宗家文書と考えるかどうかは微妙である。本稿ではこれらを宗家文書としては扱わない。

⑦ 斎藤兼蔵「初代琳琅閣主人とその周辺」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、一九九〇年〔初版一九三四年〕一六六〜一六七頁）。

⑧ 反町茂雄「明治大正篇」の成り立ち」（反町編前掲『紙魚の昔がたり 明治大正篇』六二四頁。「訪書会」とは神田神保町の中心部に店舗を構える有力者たちからなる勉強会組織のことである）。

⑨ 「紙魚の昔がたり」は初版を発行して以後も増補を重ね、その最終版が平成二年（一九九〇）に八木書店から刊行された。反町はそれぞれの回顧談に年代を付さないことから、いつ聞き取ったものなのかが分からない。加えてどの回顧談がいつ増補されたのかも不明である。ゆえに各回顧談の年紀特定は困難であるが、本稿では初版（昭和九年（一九三四））を下限として話を進めることにする。なお同書成立の事情については、反町前掲「明治大正篇」の成り立ち」を参照のこと。

⑩ 斎藤前掲「初代琳琅閣主人とその周辺」一一〇頁。

⑪ 村口半次郎「酒竹文庫及び和田維四郎氏」（反町編前掲『紙魚の昔がたり 明治大正篇』三〇四〜三〇五頁）。

⑫ 東京美術倶楽部 <https://toobico.jp/>

⑬ 吉田東伍については、石田淑子・加藤裕子「吉田東伍」（昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第十八巻』昭和女子大学光葉会、一九六二年）、千田稔「地名の巨人 吉田東伍——大日本地名辞書の誕生——」（角川書店、二〇〇三年）に詳しい。

⑭ 新潟県立図書館 <https://www.preflib.niigata-nigata.jp/>

⑮ 千田前掲「地名の巨人 吉田東伍」一一一〜一一三頁。

⑯ 新潟図書館では、大正七年（一九一八）六月五〜七日の会期で「特別陳列 故吉田東伍博士蒐集朝鮮本」という郷土資料展覧会が開催された（『新潟県立新潟図書館50年史』（新潟県立新潟図書館、一九六五年）二二頁。「故吉田東伍博士」とあることから、同年一月に死去した吉田を追悼する意味合いがあったのだろう。ただし、展覧会の詳細は伝わっていない）。

⑰ 石田・加藤前掲「吉田東伍」一四九頁。

⑱ 吉田は東京で読売新聞記者として勤務する傍ら、明治二五年（一九一二）九月から東京専門学校（現・早稲田大学）図書室にも務め、明治三四年（一九〇一）には喜田貞吉の後任として同校講師となった（千田前掲「地名の巨人 吉田東伍」一〇五・一九七・二二七頁）。

⑲ 竹本幹夫氏も「吉田東伍が」大正七年一月に急逝の後は、朝鮮本などを主体とするその蔵書は、早稲田大学と新潟県立図書館とに寄贈された（二）は引用者による補足、以下同じと述べている（同「吉田文庫所蔵能楽関係資料について」（『文学』四一四、二〇〇三年）二〇〇頁）。

⑳ 一方で「五百七十余冊二帖一折は、長男春太郎氏から新潟県立図書館へ寄託された」に関しては、冊数が一致せず、「寄託」されたという事実も確認できなかったことから、やや疑問が残る。なお「長男春太郎」は明治二七年（一八九四）生まれで、東京帝国大学卒業。戦後、新潟県立図書館嘱託として勤務したことが知られている（石田・加藤前掲「吉田東伍」一四八頁、竹本前掲「吉田文庫所蔵能楽関係資料について」二〇〇頁）。

㉑ 村口前掲「酒竹文庫及び和田維四郎氏」三〇五頁。

㉒ 井上のような一書店主が「対外関係の記録」「朝鮮関係」と判断できた背景には、表紙に分かりやすい記載があったためと考えられる。このような事実を踏まえるとき、思い当たるのは「朝鮮往復書」、あるいは「信使記録」となろう。

㉓ 村口が「朝鮮総督府にでも売り込めば大したものですよ」と述べていた点もヒントになる。この発言は朝鮮史編修会への売却が周知のもの

のとなっていたからこそ可能だったと考えられるからである。朝鮮史編修会への売却が大正一五年（一九二六）であったことを想起すれば、井上の回顧談がなされたのはそれ以降のことであろう。これをもとに考えれば、「今から二十五位前」とは、明治三四年（一九〇一）から明治四二年（一九〇九）までの間となる。

⁽²⁴⁾ 「売立目録」の表題に「対馬宗家」とあるものがないという意味である。検索には、都守淳夫編『売立目録の書誌と全国所在一覧』（勉誠出版、二〇〇一年）を用いた。

⁽²⁵⁾ 都守淳夫氏は「ところで本書に収録された売立目録の情報が、現在わが国にのこされた目録のすべてではない」と述べている（都守前掲『売立目録の書誌と全国所在一覧』六七五頁）。

⁽²⁶⁾ 一方で大正元年（一九一二）四月二十九日に行われた「売立」の「売立目録」＝「某旧大名家売立」（東京美術倶楽部、一九二二年）に宗家文書と思しき史料が出品されている。「一 印月江 墨蹟（豊太閣ヨリ宗対馬守へ伝来 箱書付豊公 表具 中風紺地上代紗 上下花色北絹）」、「二七 方長老 墨蹟」、「二二七 豊太閣 御朱印 卷」、「二二一 朝鮮人 書 卷」として目録に散見される（〳〵は小書き、以下同じ）。「二二七 豊太閣 御朱印 卷」は後に「下條桂谷翁遺愛品入札」（東京美術倶楽部、一九二三年）に「一五六 豊太閣 御朱印巻物」として登場する。大正元年（一九一二）四月二十九日の「売立」は先に紹介した三度の「売立」とは別物であり、対馬宗家は小規模な「売立」を繰り返していた可能性がある。なおここで取り上げた「某旧大名家売立」「下條桂谷翁遺愛品入札」の存在は、松浦晃佑氏（九州国立博物館）から御教示を受けた。

⁽²⁷⁾ 田代前掲「改訂『対馬宗家文書』について」二三頁。

⁽²⁸⁾ 朝鮮史編纂委員会は權威的な『朝鮮史』の編纂を志向した朝鮮総督府が朝鮮史編纂委員会規程（大正一一年（一九二二）二月四日付）を發したことで成立した。後に朝鮮史編修会官制（大正一四年（一九二五）六月六日付）が公布されると、朝鮮史編修会へと改組される。両者については、永島広紀「日本統治期の朝鮮における〈史学〉と〈史料〉の位相」（『歴史学研究』七九五、二〇〇四年）や、箱石大「近代日本史料と朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業」（佐藤信・藤田覚編『近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、二〇〇七年）などに詳しい。

⁽²⁹⁾ 「東京市史料採訪復命書」（国史編纂委員会所蔵KO/B17B/33v.1）。なお栢原昌三については、古川祐貴「朝鮮史編纂委員・栢原昌三の『宗家文庫』調査」（『アジア遊学』一七七、二〇一四年）三一頁で扱ったことがある。

⁽³⁰⁾ 「東京市史料採訪復命書」（国史編纂委員会所蔵KO/B17B/33v.2）。

⁽³¹⁾ 「別紙の目録」には「南葵文庫」だけでなく、「東京帝国大学史料編纂掛目録」「東京帝国大学史料編纂掛所蔵写真目録」もある。ただ「南葵文庫」を除いて宗家文書とは直接関係がないためここには引用しなかった。

⁽³²⁾ 「慶應義塾大学附属図書館所蔵宗家記録目録」（国史編纂委員会所蔵KO/B17B/12）。

⁽³³⁾ 中村栄孝「朝鮮——風土・民族・伝統——」（吉川弘文館、一九七一年）二二四頁。NHK取材班「朝鮮王朝「儀軌」百年の流転」（NHK出版、二〇一一年）一七〇頁。

⁽³⁴⁾ 坪田茉莉子「南葵文庫——目学問・耳学問——」（東京都教職員互助会、二〇〇一年）八〇頁。

⁽³⁵⁾ 「東京大学所蔵特殊コレクション一覧」によれば、昭和五三年（一九七八）時点において総合図書館に「南葵文庫」（文庫名）が九万六〇〇〇点、附置研究所（史料編纂所）に「宗家史料」が二六二八点あったという（『図書館再建50年』（東京大学附属図書館、一九七八年）三〇・三二頁）。これは「宗家史料」が東京大学史料編纂所へ移管された後の集計結果であるから、南葵文庫から寄贈された時点での蔵書数はほぼ一〇万点であったと言いうことができる（九万六〇〇〇点＋二六二八点）。

⁽³⁶⁾ それぞれ、①「宗家史料目録」（東京大学史料編纂所所蔵RS4170/27）、②「宗家史料目録」（同所蔵RS4170/28）、③「宗家史料目録稿」（同所蔵RS4170/57）、④「宗家史料目録」（同所蔵RS4170/58）である。

⁽³⁷⁾ 「東京大学史料編纂所所蔵 宗家史料目録」（東京大学史料編纂所、一九九四年）。

⁽³⁸⁾ 「あとかき——編集の経緯——」（『参考書誌研究』七六、二〇一五年）二六八頁。国立国会図書館が述べる「国会図書館所蔵文書目録・慶応大学図書館宗家記録集目録抄」とは、「国会図書館・慶応大学図書館所蔵 宗家記録目録」（長崎県史編集室、一九六七年）のことである。

⁽³⁹⁾ 修理に関しては、倉持隆「重要文化財の保存と活用——対馬宗家関係資料の修理事業を中心に——」（『MediaNet』一六、二〇〇九年）を、デジタル画像公開に関しては、<https://collections.lib.keio.ac.jp/ja>を参照されたい。

⁽⁴⁰⁾ 武田勝蔵については、古川祐貴「帰ってきた対馬宗家文書——叙任文書の流転——」（『東風西声』一九、二〇二四年）四七〜四八頁で触れたことがある。

(41) 武田勝蔵「七十年も昔大正六年の木坂の思い出」(『対馬風土記』二四、一九八八年)一頁。武田勝蔵の養父・武田尚には嗣子がいなかったことから、明治四二年(一九〇九)二月二五日に田辺松五郎の長男・勝蔵と養子縁組することとなった(小松勝助「半井桃水書状——対馬洋のこと——」(『対馬歴史民俗資料館報』二一、一九九八年)八頁)。

(42) 武田勝蔵「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣」(『史学』四一三、一九二五年)、同「正徳信使改札の教諭原本に就て」(『史林』一〇一四、一九二五年)、同「宗家史料による復号一件」(『史学』五一、一九二六年)など。

(43) 頓挫した結果書かれたのが、武田勝蔵「宗家文書の中より」(『史学』五一三、一九二六年)、同「宗家文書より(二)」——豊公文書拾遺附秀次文書等——(『史学』五一四、一九二六年)である。

(44) 以下の記述は特に断らない限り、古川前掲「大韓民国国史編纂委員会所蔵『対馬島宗家文書』の形成」による。

(45) 「対馬島宗家文書購入関係資料綴」(国史編纂委員会所蔵K0、No. B0D、N7)。本史料は朝鮮史編修会が作成した行政文書である。手紙の内容も含め朝鮮史編修会内部で起案がなされ、決裁を受けた後に、施行(黒板へ送付)されたものと見られる。

(46) 朝鮮史編修会への売却は黒板と対馬宗家の後見をしていた大木遠吉(貴族院伯爵議員)との間でおおよそ決定がなされた(古川前掲「大韓民国国史編纂委員会所蔵『対馬島宗家文書』の形成」三九頁)。

(47) 中村は昭和五年(一九八〇)に行われた田中健夫氏・北島万次氏による聞き取り調査の中で次のようなことを述べていた(中村栄孝「朝鮮史と私」(『日本歴史』四〇〇、一九八一年)五四頁)。

田中『宗家朝鮮陣文書』が朝鮮史料叢刊で、昭和十二年に出版されていますね。

中村 あれは東京にあったものの一つです。あれは借り入れて、用がすんだら返すことになって、借用書が宗武志さんのところに行っているはずですよ。

田中 まだ借用中なのですか、あれは。

中村 ぼくが引揚げてきてから、それについて世話をしなければいけないかったのでしょうか、それから宗さんにお会いする機会を持たずに今日まで無精しているわけです。

(48) 引用史料中の「(別紙目録御参照)」が「宗家史料目録」を指していると考えられる。直前の文章に「現二第三号文書二依り相当御判物等ヲ返還セルニ拘ラス」とあるが、この中に対馬宗家側へ返却された

「御判物等」は一つも含まれていない。朝鮮史編修会の誤解が方便であっただろう。この点については、古川前掲「帰ってきた対馬宗家文書」四八頁でも指摘した。

〔付記〕本稿はJES科研費・若手研究「対馬宗家文書の研究資源化に関する研究」(22K13189、研究代表者：古川祐貴)の成果である。